OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	三十周年を迎えて
Author(s)	辻, 忠男
Citation	makoto. 1977, 20, p. 10-11
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86167
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

三十周年を迎えて

財団法人　阪大微生物病研究会
理事　辻　忠男

終戦後社会生活が甚だしく荒廃混乱した中で、伝染病の大流行が起った。戦争と伝染病は昔からつきものだといわれているが、敗戦の憂目を見た我国では一層みじめなものであった。痘瘡、腸チフス、赤痢が終戦とともに爆発的に発生した。中でも痘瘡は戦時中の数十倍の一八、〇〇〇人（内死三、〇〇〇人）という大流行であり、発疹チフスは三二、〇〇〇人（内死三、三〇〇人）コレラ一、二〇〇人（内死五六〇人）というように、衛生状態の悪化はまことに惨たんたるものであった。

当時進駐軍当局から、公衆衛生対策に関する覚書が発せられ、一般公衆の健康に著しく影響がある伝染病に対して、予防接種を実施すること。治療用血清、予防用ワクチンの製造をすみやかに再開することなどが示された。ついで昭和二三年、伝染病の慮がある疾病の発生及びまん延を予防するために、予防接種を行い、公衆衛生の向上及び増進に寄与することを目的として、予防接種法が制定された。

戦前からワクチン類の生産供給を行ってきた、われわれ財団法人阪大微生物病研究会も、終戦後一はやく各種ワクチン血清類の生産を開始した。

丁度その頃、大阪防疫協会は設立された。伝染病予防ならびに環境衛生に関する、府市の行政に協力して、衛生知識の普及、防疫工作の実施、ワクチン等防疫資材の斡旋事業を開始され、終戦当時の発疹チフス、腸チフス、痘瘡、コレラ等の防疫工作に、大いに活躍された。その功績はきわめて顕著なものがあった。

それ以来、大阪防疫協会と、われわれ阪大微研会とは、ワクチン等防疫資材の生産と供給について、相互に密接な協力がつづけられてきたのである。

昭和二三年突如として、日本脳炎患者が大発生した。つづいて昭和二五年にも五、一五六人（内死二、四二〇人）という大流行になった。その後毎年二―三千人の流行がくりかえされた。その間に日本脳炎ワクチンの試作実験がすすみ、昭和二九年に人に対する日本脳炎ワクチンが生産され、一般の予防接種に供されるようになった。ついで微研天野教授等の研究によって同ワクチンの総窒素含有量が削減され、昭和三二、三七、四〇年の三回にわたってのワクチン改良を可能にし、その品質が当初にくらべると不要蛋白は殆んど除去され、極めて高度に精製したワクチンとなり、しかも力価は倍以上に高く、副作用についても殆んど心配のない、ワクチンが供給されるようになった。

昭和四一年に近畿以西に日本脳炎の大流行があって以来、急激に患者発生が減少しているこ

とは、誠に喜ばしいことである。しかし媒介蚊からのウイルス分離や、豚の抗体陽転等の調査によって、日本脳炎汚染地域の指定が毎年つづいていることは、十年又は十数年の間隔で、大流行が起っている過去の例を見ても、決して楽観を許されないものである。

次にインフルエンザワクチンの研究は、昭和二三年頃から阪大微研会で試作実験がすすめられ、昭和二五年には国産ワクチンが供給された。その頃はH1（A_1型）ウイルスの流行であった。昭和三二年と三三年のアジヤかぜの大流行から昭和四二年まではA_2型、昭和四三年のホンコンかぜの大流行以降は（A_2ホンコン型）というように、インフルエンザウイルスはA型B型とも毎年少しづつ抗原構造が変化する。又A型の場合には約十年に一回ぐらい、突然に全くちがった抗原構造の新型ウイルスの大流行が起るものだといわれている。したがって国立予防衛生研究所では、毎年のインフルエンザ流行株を調査して、翌年の流行株を予測指定して、その指定株のワクチンが毎年生産供給されている。

インフルエンザワクチンの安全性と有効性を高めるため、その精製技術が進められ、昭和四七年からはウイルスをエーテル処理して、ウイルスの糖脂質を分解除去することによって、さらに多量の有効成分を含ませた、副作用の少ない、防禦効果の高いワクチンに改良され、「インフルエンザHAワクチン」として生産供給されている。

その間に昭和三五年から三六年に北海道をはじめ各地で、小児まひ患者が集団的に発生した。それに対応するため、昭和三六年から不活化ポリオワクチン、ついで経口生ポリオワクチンが生産供給された。全国的に投与がはじめられて以来、急激に患者発生は減少して、皆無になったとはいえないが、ポリオワクチンの予防接種の効果は誠に顕著なものである。

さらに麻しんワクチンについては、故谷口腆二博士の戦前からの研究を、引続きすすめられた阪大微研奥野教授等が、弱毒生麻しんワクチンを開発された。麻しんワクチン研究会における調査実験の結果、昭和四一年に不活化麻しんワクチン（K）、弱毒生麻しんワクチン（L）を併用する、所謂KL法で予防接種が実施された。その後ワクチ

ン株の弱毒がさらにすすめられ、昭和四五年からは高度弱毒生麻しんワクチン（微研ＣＡＭワクチン）を単独使用として、実用に供されることになった。

一生に一度はかゝり、命定めとまでいわれたはしかも、一回の予防接種で安全に一生防禦できるようになったことは、まことに福音といわねばならない。

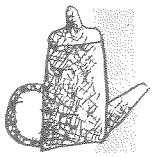
最近になって風しんの流行に見舞われ、特に妊婦が風しんに罹患したとき、先天性奇形児が生れやすいということから、この予防の重要性が問題となった。昭和四〇年から沖縄での大流行につづいて、昭和五〇年から全国的な流行となった。阪大微研では昭和四三年以来風しんワクチンの研究を重ね、乾燥弱毒生風しんワクチンを開発した。昭和五一年になってようやく製剤基準が制定され一般に使用されるようになり、今秋から定期予防接種として実施されることになっている。

以上のように終戦以来の医学、生物学の進展にともなって、在来のワクチンに格段の改良が加えられたのみでなく、新しいワクチンが開発供給された。

近時我国における伝染病の発生が減少の傾向にあることは、国民生活の向上、衛生知識の普及、生活環境の改善によるところ大であるが、とりわけワクチンの改良、開発による予防接種の効果も、きわめて大きいといわなければならない。

最後になりましたが、大阪防疫協会の創立三十周年を心から御祝申し上げるとともに、創立当初から理事長として、環境衛生に協力し万難を排して一づに防疫衛生を通じて、文化向上に邁進してこられた、辻野理事長をはじめ協会職員の方々の、地味な努力に対し敬意を表するものである。

今後益々公衆衛生のため、生活環境の整備、公害予防等の事業を拡大され、又伝染病予防のため、衛生知識の普及と、集団、個別の予防接種を円滑に実施できるよう、ワクチン等防疫資材の斡旋供給事業に協力され、貴協会の今後の御活躍御発展を切に祈念します。



（財）大阪防疫協会の概要

協会の目的

大阪府、市の防疫施策に協力し伝染病予防ならびに公衆衛生の業務を通じて文化の発展に寄与するため次の事業を行う。

記

1. 防疫思想及び防疫知識の普及および啓発
2. 防疫工作の実施
3. 防疫並びに衛生資材及び薬剤の斡旋
4. 防疫に関する調査並びに研究
5. その他防疫並びに公衆衛生上必要と認めたる事項

経歴

昭和22年 5月15日	大阪市東区大手前会館において発会式を挙行
22年 6月23日～27日	朝日新聞社の協力を得、ポリー車で夏季清掃宣伝を行う。
22年 8月 1日～20日	松坂屋に於て衛生思想啓発のため美化展を開催。
23年末	発疹チフスの大流行にあたり、府当局の撲滅予防対策の実施に全力をあげて協力。
23年12月20日～26日	サンドイッチマンを以て市中行進し年末清掃の宣伝を行う。
24年 1月	曽根崎警察署屋上に常備放送設備をして、天然痘患者発生時の予防接種の励行および一般公衆衛生について通行市民に呼びかける。
24年11月18日	組織を財団法人に改め、財団法人大阪防疫協会と呼称す。
23年 7月～現在	伝染病予防ポスターを数回にわたり累計10万枚を作成し宣伝につとめる。
昭和27年 7月～現在	過去数回にわたり各地を襲った風水害に際し、動力噴霧機付自動車を出動させて防疫消毒に協力し、又消毒薬剤等を寄贈し、伝染病発生防止に微力をつくす。
30年 6月～現在	厚生省の「蚊とハエのいない生活」運動の実践指導に協力するため「昆虫駆除の手引」を、その他「赤痢の予防」「日本脳炎のはなし」等を10数回にわたり作成し無料頒布す。
33年 7月～	防疫宣伝用手拭並びに「万国博」に協賛のための宣伝手拭を数万枚作成し無料頒布す。
35年 3月～現在	大阪府主催のねずみ駆除月間運動に協賛、被表彰者に記念品を寄贈し志気の高揚に微力をつくす。
42年10月～	（社）大阪環境衛生コンサルタント協会の事務局を兼務し、理事長辻野直三郎は初代会長に就任し発展に尽力す。
43年11月	理事長辻野直三郎は日本ペストコントロール（ＰＣＯ）協会（ねずみ害虫駆除）副理事長に就任しその発展に尽力す。
47年 3月	理事長辻野直三郎は（社）日本ペストコントロール協会の設立発起人となり設立にあたり副理事長に就任その発展に尽力す。
47年10月～49年 7月	（社）日本ペストコントロール協会の理事長に就任
49年 7月～現在	（社）日本ペストコントロール協会顧問に就任